

2016年10月に発売されたB&Wの生誕50周年を記念するヘッドフォンであるP9 Signatureですが、期間を限定(2017年6月21日～8月31日)して行うリケーブルPEC-P5S2のプレゼント・キャンペーンを機会に、P9 SignatureとそのリケーブルであるPEC-P5S2のサウンド・パフォーマンスの検証、更に弟機であるP7 Wirelessとのサウンド・キャラクターやパフォーマンスの違いを述べてみたいと思います。

『概要』

P9 Signatureは、B&Wの他のモデル(P5S2～P7 Wireless)に比べて高価な分、設計の自由度と高いパフォーマンスのゴールが与えられた結果、構造的にも意匠的にも非常に凝った製品となっています。構造的な詳細は下記のYouTubeでご覧いただけます。

<https://www.youtube.com/watch?v=ZBnAWqF5ha8>

一言でいうと、デビュー作であるP5系からP7系へと続く開発の中で想起され蓄積された、様々なアイデアを可能な限り具現化した内容と言えます。

更に具体的に述べると、それはB&Wの50年に渡るスピーカー作りのテクニックを、発声原理は同じでありながら、サイズ的にあまりにも異なる(小さいためにスピーカーに比べて制約が非常に大きい)ヘッドフォンに落とし込んだという事に他なりません。

しかし意匠的には、中身のテクニックをひけらかすことなく、マテリアル(本革やメタルパーツ)の持つ質感を巧みに生かした完成度の高いヘッドフォンになっています。

メタルっぽいプラスチックであるとか、本革っぽいビニールなどは、当たり前ですが使われることは無く、適切なメンテナンスさえ定期的に行えば、本革部分のエージングによって変化する味わいも楽しめます。

B&Wは、このサイズと価格にもかかわらず、“ポータビリティ”にこだわった結果、折り畳み方式を採用しています。両方のイヤークップが内側に折り畳まれ、かなり小さく収納できます。

メタル・アームに隠れたヒンジによって折り畳みを可能にしていますが、折り畳み式にありがちな、可能部分の遊びに起因するグラグラ感などは皆無で、ビシッとした装着感を実現しています。

『試聴方法』

使用機材は以下のようになります。

■USB DAC/ヘッドフォン・アンプ：marantz HD-DAC1、

■音源：iPhone7 からの WAV データ

■USB ノイズ・フィルター：AudioQuest JitterBag

■USB ケーブル：AudioQuest USB Diamond

■電源ケーブル：AudioQuest NRG-X3

■電源フィルター：AudioQuest Niagara1000(日本未発売)

『P9 Signature のサウンド』

さてそのサウンドですが、P7 や P7 Wireless に比べて、余りにも月並みな言い方になりますが、より「自然で生っぽい」

表現となっているのが一聴して分かります。

例えばクラシックのオケがホールの中に自然に存在し音楽を奏でる様は、実際のホールでは決して経験しえないわざとらしい音の輪郭が強調されたりすることなしに、オケがホールの空間と溶け合いながらもその実在感をはっきり知覚できるパフォーマンスを表わしています。

つまりややこしい言い方ですが、自然の中のサウンドのように「柔らかいけどはっきりしている」のです。

日常会話の中で、相手の声の子音がきつく聞こえたりすることなどありえないように、或いはあの強力な雷

であっても、自然界で聞くその生の雷鳴は、実は非常に柔らかく、その輪郭は空間に溶け合っ聞こえるというあれです。

これを実現しているのは、まず歪みが非常に低く(耳に刺さる成分が少ない)、サウンド・バランスがまっとうである、広い周波数レンジを確保しているという事です。

多くの伝統的なヘッドフォン・メーカーが意図的に中高域をブーストし、それに反して低域を絞り気味にする手法を取り続けていますが、P9 Signature はそのような手法はとっていません。

よって、P9 Signature を装着しその再生音を聴いても、そのような非現実的なシャープネスは現れず、

サウンドのテクスチャーやバランスはまさに、B&W のトップエンドを象徴するスピーカーである「800D3 シリーズ」そのものと言えます。

これは、B&W がスピーカーとヘッドフォンを分け隔てることなくサウンド作りをしている事に他なりません。

実際、P9 Signature の開発ピリオドと 800D3 シリーズのそれは重複しており、結果、800D3 シリーズで取り上げられた新しい技術の数々が P9 Signature で取り上げられています。

『P9 Signature と P7 Wireless』

では両者のサウンドの違いはどうかということになりますが、その説明の前に、両者のドライブユニットのイヤークップ内でのマウント方法の違いによる定位感の相違いを述べたいと思います。

P7 Wireless はコンベンショナルなヘッドフォン同様、そのドライブユニットは耳に対して並行にマウントされています。

一方、P9 Signature のそれは、耳のやや前方に傾斜してマウントされていて、前方に設置された通常のスピーカーとリスナーの位置関係を、ヘッドフォンの世界で何とか近づけようとする努力が見て取れます。

P7 Wireless の定位がまさにストレートな頭内定位に対して、P9 Signature の定位感は、耳と耳を結ぶ直線よりやや前あたりに移動し、それは P7 Wireless とは異なる定位感ですが、とは言ってもやはり頭内にあり、残念ながらスピーカーによるリスニングのように眼前に展開されることはありません。

しかし僅かであってもその違いは存在し、特に長時間モニター時の疲労低減に役立ちます。

P7 Wireless を有線接続したときの両者のサウンドの違いということでは、言ってみれば”HiFi”度の違いということに集約されそうです。

より HiFi であるということ、 「より低い歪」「より低いカラーレション」「より広くフラットな周波数レンジ」などで表現されることが多いですが、そのような単に無機的な表現の羅列でなく、それらが有機一体化した結果、より「生っぽい」サウンドを奏でるのが P9 Signature になります。

両者のサウンド・テクスチャーやバランスは、開発メンバーが同一ということもあり非常に近似ですが、コスト上の制約や異なった機能(ワイヤレス)にフォーカスしているため同一のサウンドとすることは不可能です。

P7 Wireless はエッジがやや強調され、それはパンチやキレを要求するある種の音楽には有効ですが、例えばボーカルに乗るある種の強調感が、パツと聴き「クール」と感じさせる反面、結果として音楽表現をややもすると制限することにもつながりかねません。

キャリアを積んだ HiFi マニアでクラシックやナチュラルな録音を中心にコレクションしている方や、長時間リスニングを必要とする方、或いはミキシングなど何よりもニュートラルなモニタリング環境が必要な方には P9 Signature は、大きな武器になるはずです。

『PEC-P5S2』

P5S2 と P5 Wireless 用のリケーブルとして弊社 D&M が開発したのが PEC-P5S2 ですが、P9 Signature 用のリケーブルとしても有効です。

一見すると PEC-P5S2 は付属のケーブルに比べるとかなり細く頼りなく見えますが、オリジナル・ケーブルの導体断面積が 0.035sq であるのに対して、PEC-P5S2 のそれは 0.045sq と約 30%UP を確保しています。

オリジナル・ケーブルが太く見えるのは、導体を保護する PVC のジャケット層が単に厚いということになります。

導体の素材は PEC-P5S2 が PCOCC であるのに対し B&W はその内容を明かしておりません。

さて、その両者のサウンドですが、ボリューム感、帯域バランス共ほぼ近似のため、付け替えた直後の違和感はありません。

ません。

異なる部分は“透明感/トランスペアレンシー”で、その差は微妙であっても PEC-P5S2 に軍配が上がります。

上述のように、キャラクター的な差は殆どないので音楽のジャンルで付け替える必要も発生しません。

PEC-P5S2 のみで全てのシチュエーションに対応可能です。